

# フォルカー・ブラウン『レーニンの死』 上演をめぐる

～東ドイツと「ペレストロイカ」に関するひとつの報告～

南 守 夫

## 〈最前線としての演劇〉

1987年9月から88年7月にかけての東ドイツ（ドイツ民主共和国、以下ドイツ語の正式略称である“DDR”と表記する）の首都ベルリンの演劇シーズンにおいては、ソ連におけるいわゆるペレストロイカまたは現在の社会主義社会の改革問題と関連のある作品がかなり上演され、注目を集めていた。代表的なものだけ挙げると、ドイツ劇場では、作者のハイナー・ミュラー（Heiner Müller）自身による『賃下げ野郎』（Der Lohndrucker）の新演出、ゴーリキー劇場では、フォルカー・ブラウン（Volker Braun）の新作『過渡期社会』（Die Übergangsgesellschaft）の初演、そしてベルリナー・アンサンブルでは、すでに5年余りも続いているソ連のミハエル・シャトロフ（Michael Schatrow）の『赤い草の上の青い馬たち』（Blaue Pferde auf rotem Gras）、さらに新しいレパートリーとして以下に取り上げるフォルカー・ブラウンの『レーニンの死』（Lenins Tod）などがあった。この他、シャトロフの新作『良心の独裁』（Diktatur des Gewissens）がドイツ劇場で、シーズンの最後に2日だけ上演されたが、私は前売りの日を含めて合せて5～6時間も並んだが結局チケットを手に入れることは出来ない、という人気振りであった。政府見解をそのまま伝える新聞やテレビと比べて演劇はDDRにおける社会主義の現状についての問題意識の新しい動きを最も敏感に反映する分野となっている、という印象を受け

た。

ここでブラウンの『レーニンの死』を取り上げるのは、一つにはこの作品の上演自体がソビエトのペレストロイカの動きに直接関係する現象だということ、さらにその内容がトロツキーやブハーリンなどがDDRの舞台でおそらくはじめて登場し、レーニンの病状悪化の後にスターリンによって排斥されていく過程を、スターリン批判を軸に描いているものだという点で、いわゆるソ連における「歴史の空白」を埋める動きとも直接繋がりが、かつDDRの現実の批判的見直しにも繋がる問題性を孕むものとして、興味深いと思われるからだ。また、個人的には、この劇の稽古の開始から上演に至る過程で舞台裏を覗くことができ、上演に係わったひとたちの問題意識を直接知る機会があったからである。従って、以下において意図しているのは、まとまった作品研究や、作家研究ではなく、一年間のDDR滞在中の体験等も交えて、飽くまでDDRとペレストロイカという問題との関連で、この劇の上演をめぐる若干の状況の報告とその意味についての一つの考察である。

### 〈上演まで〉

この戯曲の書かれたのは実は1970年のことだった。戯曲は『ジン・ウント・フォルム』誌の88年の第一号において、はじめて公表され、6月末に初演された。つまり、20年近くも出版も上演もできなかったわけである。その理由について、ある上演関係者は私に、ソ連からの圧力のせいではないか、と語った。この劇でのスターリンやトロツキーなどの扱い方が問題視されたためだったと。それが、ソビエトからの圧力がなくなって、上演できるようになった、という話だった。西ドイツのある演劇年鑑(Theater 1988, Jahrbuch der Zeitschrift, Theater heute)における最近のインタビューでブラウン自身がそのことを裏書きしている、「1971年の始

めにペンクラブで朗読会があった。それから非常に高いレベルにおける非常によい話し合いが。しかしそれは当時 DDR においては我々の手の届かない問題領域だった。それはソ連の話だった。」これ以上その経過は明らかにされていないが、この皮肉の利いた証言から、1988年になってからの出版と上演そのものが、ソビエトにおける歴史の見直しの動きの影響のひとつの具体的な現れとみなすことができる、ことがわかる。

ベルリナー・アンサンブル（以下“BE”と略記する）のスタッフも、この関連、つまりソ連における新しい動きに呼応して、DDR においても演劇面でおなじ方向の試みを行うということをはっきりと意識している様子が見て取れた。

DDR 芸術アカデミー総裁も兼任する総監督のヴェックヴェルト（Manfred Weckwerth）は、88年春のこの『レーニンの死』の稽古の開始にあたっての挨拶の中で、この芝居を持って来年春にモスクワのヴァハタンゴフ（Wachtangow）劇場に客演し、逆にヴァハタンゴフ劇場が BE に客演する、という計画があることを披露し、ソ連の演劇面での新しい動きと具体的に交流しようという姿勢を示した。

この稽古開始の際の集会ではまたベルリン演劇大学のエングラ（Wolfgang Engler）が報告したが、そこでは歴史における個人の役割の再検討の必要性について、つまりレーニンが例の最後の大会への手紙で指摘し、党分裂の原因となるかも知れないものとして恐れた、スターリンの「粗暴さ」やトロツキーの「自信過剰」などの個人的資質の問題、「あるいは瑣末事としても、決定的な意義を持つようになりかねない瑣末事」と述べた問題について検討され、その関連で社会主義の政治制度における複数主義（Pluralismus）の必要性の問題が提起されていた。

関係者の関心が単に1920年代のソ連の事件にあるのではなくて、自分たちの DDR の社会主義の現実の見直しにあることは、稽古開始後しばらくたった5月末に、今度は DDR の政権政党である社会主義統一党（以下

”SED”と略記する)の劇団内の党支部の主催で開かれた集会での討論にはっきり現れていた。この集会は、月に一度の定例の党員集会だが、最近では部外者の参加も認めるようになってきたものだそうで、私は、ある劇団員に誘われて参加させてもらうことができた。この集会の持ち方の変化もあるいは、オープンな議論の広がりという現象のあらわれの一端なのかも知れないが、それはともかく、この日は『レーニンの死』に関連してペレストロイカをテーマに取り上げるということで、作者のブラウンも含めて、多くのメンバーが集まっていた。まず、「ペレストロイカの背景としての“レーニンの遺言”」というテーマである教授が講演した。ところが講演は、レーニンの1922年末の「大会への手紙」などの解説が中心で、現在のDDRにとってのペレストロイカの意味、という問題にはまったく触れないものだった。そこで、討論の時に、ある俳優が、かなり激しい口調で食ってかかったのである。「あなたの言ったことには新しいことは何もない。我々がいま毎日7時間も稽古しながら、考えているのは、ペレストロイカはここでは何を意味するか、ということだ。ここではいつも平和政策の話ばかりだ。」などと。それに対して、その教授は、「普遍的にあてはまる社会主義の原則などはない。様々なやり方が可能だ。」と言って、DDRの現指導部がペレストロイカの、特に「民主化」や「公開」政策などの内政改革に対して明確に距離を置いていることを、間接的な言回しで、擁護した。その俳優はなおも食いさがったが、教授はいっこうにDDRのことについては明確に述べないで、腹を立てて、途中で一人出て行ってしまふ、という一幕があったのである。またこの時、ある参加者が述べたことが印象に残った。すなわち、「DDRでは今皆が各々のやり方でペレストロイカというスープを煮ている。それは、しかし意気阻喪させる状況だ」と。つまり、DDRにおける社会主義の現状の改革についてそれぞれ強い関心を持ってはいるが、それが具体的な政策レベルでは一向に具体化されないの、そしてまたその具体化がSED指導部の方針によって押えつけられているので、方向が見つからず、その問題意識が萎えていく

これは問題だと思う。もっと、皆が率直に問題点について話し合うようにすべきだ。」という答えだった。刑法に関しては、「刑法については詳しくはないが、DDRの刑法はあまりに人間的すぎるくらいだ、と思っている」と言った。すると、私の後ろにすわっていた学生が、「それは違う」とすかさず、一言発言した。あとで触れるが、今ソ連で改正が問題になっているのと、ほとんど同じような条項が、DDR刑法にもあって、実際に言論や表現の自由を不当に抑圧するために使われている、と考えざるをえない。いずれにしても、その講師もDDRでも一定の改革が必要だ、とは考えていたようである。

さて、先に触れた閉塞的な状況については、国家権力による抑圧的姿勢から来る側面と、SEDの黨員も含めて、DDRの状況における具体的で適切な改革の方法がわからない、という側面との両方がある、と言えるかも知れない。しかし、たとえば、後のDDRの新聞報道における要約によると、87年暮れの作家大会では、出版の自由に関するハイン(Christoph Hein)の分科会報告に基づいて活発な議論が行われ、「出版者と出版社の役割と地位が強化されるべきである」、という意見が作家や出版関係者たちによって表明されたと、伝えられている(87年11月27日付けのSEDの機関紙『ノイエス・ドイチュラント』紙。以下“ND”と略記する)。これは、出版に際しての文化省の規制力を弱めることを意味する。議事録によれば、ハインは明確に「検閲」(Zensur)の廃止を要求している。つまり「民主化」のための具体的な改革案も提起されているのである。

そのSED指導部のベレストロイカに対する姿勢だが、これについては、すでに日本の新聞でもいろいろと報道されている。87年には、SEDのイデオロギー担当の最高責任者クルト・ハーガー(Kurt Hager)の「隣の家が壁紙を変えたからといって、われわれのところを変える必要はない」という旨の発言が報道され、88年11月には、スターリンとヒットラーをめぐる扱い方のためにソ連の雑誌『スプートニク』(Sputnik)ドイツ語版が発

禁に、そして何本かのソ連映画が上映禁止になったことなど、さらに DDR 国内での改革論議を抑える SED の姿勢が明確になってきた、旨の報道があった。しかし、これらの報道は、断片的で、その背景がわかりにくい、この点で明確に、そして詳しく SED 指導部の姿勢が表明されたもの一つに、88年6月9/10日の SED 第6回中央委員会でのクルト・ハーガーの政治局報告がある。

### 〈DDR 政府の立場〉

この報告の「社会主義の形成は創造的プロセスである」という表題の第2章でまず、解放記念日におけるホーネッカーのブラウダへの論文が引用されている。「我々の時代においては、すべての社会主義国の努力は、その行動の基礎であるマルクス＝レーニン主義を、各国の条件に応じてより一層効果的に適応する、という方向にむけられている。各々の党は、その国民に対する責任を果たす中で、それぞれの国の社会政治的課題に対する、その具体的な条件と必要を最もよく考慮した解決を見出だすという使命を持っている。それはまた、社会主義の国際的強化への最も重要な貢献でもある。」このように、各国の独自性を一般的に強調した引用のあとで、DDR に関して、つぎの様に続けられている、「我々の国の現実において決定的なことは、DDR は経済と科学と教育と文化のダイナミックな成長をともなった安定した社会主義国家である、ということである。我々は大きな進歩を記している、そして複雑な世界情勢に直面しながら、そしてまた我々の DDR の現実への外からの絶えざる影響にもかかわらず、そうなのだ。」こう言い切って、西ドイツあるいはひょっとしてソ連の影響にもかかわらず、安定し、成長しつつある社会主義を作ってきたという自負を表明している。そしてさらに、歴史を振り返って、「今日ますます1971年の SED 第8回党大会の諸決定がいかに正しいものだったかが、証明されている。すなわち、生産の全面的な効率化の道を断固として歩むこと、経済

政策と社会政策の統一を保持すること、科学技術の進歩を促進し、経済的に効果的な適応をすること、急激に拡大した再生産と科学技術革命の要求に適した、経済的な会計の計画づくりと指導のシステムを作り出すこと、である。」こう述べて、具体的に経済成長の統計数字を列挙している、国家総収入額や工業生産が、1970年から87年までに2倍以上に増えているとか、国民の実質現金収入がやはり2倍近く増加しているとか、1971年以後284万軒以上の住宅が新築または改良されて、二人に一人の国民が居住条件が改善されたことを実感していることなどの「争う余地のない事実」を挙げている。そして、興味深いのは、その際、この第8回党大会以後の変化を大きな「変革」(Umgestaltung)と呼んでいることである。この"Umgestaltung"というドイツ語は、とりもなおさず、"ПЕРЕСТРОЙКА" (ペレストロイカ)というロシア語のドイツ語訳として一般に使われている言葉なのである。つまり、報告者はもちろんそのことを十分承知の上で、この言葉を敢えて使い、我々の方はすでに1970年代のはじめから、DDRにおけるペレストロイカを行い、成功してきた、ことを暗示しているのだと、思われる。要するに、ここで述べられていることは、経済がうまく行っているDDRにはソ連のような内政変革を今必要とする理由はない、ということに尽きるだろう。これが、少なくともこの時点での、つまり我々が問題にしている芝居の上演が準備されていた時点での、明白にそして正式に表明されたSEDの立場である。

では、文化面についてはどう述べているかと言うと、「教育の高い水準のために」と題された第5章で、つぎのように触れられているのみである、「我々の党は創造的な精神的雰囲気を奨励している、それは、作家や芸術家に対する高いイデオロギー上の、また道德的、倫理的要求によって、また、原則に忠実でかつ信頼に満ちた態度によって特徴付けられている。この信頼に満ちた相互関係のなかで、我々の時代の諸問題や芸術的創造に係わる全ての問題が解明されることができる。」このように従来からの立場をそのまま繰返すのみで、公開や民主化に関する具体的な言及はまった

く無い。

さて、ではこの報告で何も目新しいことはないかという点、少しはある。例えば第6章では、現在作業中の新しい4巻本のSEDの歴史について触れられ、そして「そこでは何事も秘密にはされず、あるいは、曖昧にはされない。歴史は実際そう進行した通りに、その実際の姿と完全さにおいて、叙述される。我々はその際、「空白」を捜すことを企てる理由はない。」こう述べて、ゴルバチョフも使っている歴史の「空白」という言葉に対する一種のあてこすりをやっている。それはともかく、そして具体的に、スターリンの粛清に関連して、次のような興味深い一節がある、「中央委員会のメンバーも含めたドイツの共産党員にもふりかかった、1937/38年のソビエト連邦における法律違反と迫害に関連する問題は、すでにソビエト共産党第20回大会の後で中央委員会と中央統制委員会によって取り扱われた。1956年から1962年の年月に該当する同志たちの名誉回復が行われた。我々の党はその法律違反とスターリンをめぐる個人崇拜を深く遺憾に思い、きっぱりと断罪した。それについてもそのSEDの歴史において報告されるだろう。」では、なぜ今までは、公表されていなかったのか。また、今度はじめてそのことが報告されるのは、またなぜか。ここには、『レーニンの死』が執筆後20年近くたってようやく上演できるようになったのと同様な事情、つまりペレストロイカ政策に基づくソ連での歴史の見直しの一一定の影響を感じずにはいられない。

それはともかく、根本問題は、果たしてSEDがスターリンの負の遺産を本当にきっぱりと精算しているのかどうかである、その党組織や選挙や刑法や言論統制の在り方などにおいて。これが、とりもなおさず、『レーニンの死』の上演に係わる人々の基本的な問題意識であると、言える。演出のシュロート (Christoph Schroth) は私とのインタビューにおいて、「現在のDDRにおいてもまだスターリン的な社会主義観が完全には払拭されていない。その克服がこの芝居の上演の基本的なモチーフだ。」と非常に

率直に語っていた。そして、その可能性はあると思うか、という問いに対しては、即座に「それを信じていなければ、もともとこんな芝居はやってないよ。」という返事が返って来た。

## 〈トロツキー〉

さて、まず上演の際の配役に関して興味深いのは、トロツキーをアルノー・ヴツニェフスキイ (Arno Wyzniewski) が演じることである。この俳優は、同じシュロート演出の先に挙げた『赤い草の上の青い馬たち』で、何とレーニンをやっているのである。しかも、この劇は現在も最も人気のあるレパトリイの一つとして上演されている。つまり、レーニンを演じたかと思うと、すぐまた今度はトロツキーを演じるわけである。また、彼は現在の BE で最も人気のある俳優のひとりである。このことをシュロートに尋ねてみたら、彼はもちろんそれらのことを十分考慮に入れてキャスティングした、と言っていた。つまり、トロツキーというのは、DDR では、まるで悪魔みたいに扱われている。そういうなかで、レーニンを演じているイメージの強く残っている人気俳優を振り当てることによって、トロツキーに対するイメージを変えることが、ひとつの意図としてある、というのだった。因みに、シュロートも認めていたが、この俳優の容貌は、我々が写真でよく見るトロツキーのそれに、似たところのあることも確かだ。これについて、面白いことがあった。ある BE の俳優に、そのことを言ったところ、彼は、今までトロツキーの写真を見たことがなかったの、ヴツニェフスキイが似てるということには、まったく気付かなかった、ということだった。つまり、DDR の一般の人々には、トロツキーについては、まともに知られていない、という状況の一端をこのエピソードは示している。というのも、DDR の一般の図書館、たとえばベルリン市立図書館の目録カードには、トロツキーの本はまったく無かった。そしてまた、DDR 発行の百科辞典を発行年代別に、調べてみると、古い

ものには、トロツキーが革命当時赤軍指令官だったことや、講和条約の際の全権大使だったことさえ、書かれていず、ただ反革命の活動した、というような叙述になっている。最近になってようやく、その具体的な経歴も書かれるように、変わってきている。しかし、結局、評価は否定一遍倒である、一番最近のものにおいても。

こういう状況だから、トロツキーをどういうふう to 扱うかは、戯曲においても、上演においても、最も注目される点の一つと、言えるだろう。この戯曲において、トロツキーはまず独善的で、支配欲の強い人物として、他の政治局員から警戒されている姿が示される（第2場）。そしてまた、トロツキーに対するレーニンによる明確な批判も展開される。例えば、レーニンはトロツキーに向かって、彼は革命を余りに上から、民衆を軍隊的に統制することによって行おうとしている、つまり革命家だけで社会主義社会を作ろうとしている、しかし、民衆自身が管理する能力を身につけるようにしていかなければ、それはまったく不可能だ、と。つぎの様なやりとりがある（第6場）。

レーニン：我々は社会主義を上からの布告によって作ることはできない。もし我々が民主主義と自由の問題を無価値なものとして捨去るのなら、我々は社会主義者であることを止めるのだ。もしも我々が大衆の思想の豊かさを解放することを目指さないなら、我々は個人的な思想の豊かさを必要とはしない。貴方は、もはや厳格な教師の役を演じることはできない。

トロツキー：革命を望むか、否かだ。その目標を望む者は、その手段を望まなければならない。労働者の解放のための手段は革命的な暴力である。人間は生来怠け者である。人間は労働英雄としては生れていない。その怠惰にかなりの部分、人類の進歩は基づいている。人間はその身体に楽をさせ、ほんのちょっとの指の動きでできるだけ多くのものを動かすことを目指すから、技術や文化が発展する。経済的な圧迫はその

怠惰に自然発生的な限界を設定する。我々はそれを意識的に限界まで持っていかなければならない。我々が人類の多数者の利益のために仕事を組織するという事は、国家による強制がみずから恥じて歴史の舞台から退場する、ということの意味しはしない。ブルジョワジーは欺いた。我々は自由主義的な、カウツキー流の童話を問題にしていない。反対だ、我々は自由な労働という虚構を頭から叩きださなければならない、そして強制をも含む義務という原則をハンマーで叩きこまなければならない。計画というものはそれ自身服従と自己否定、そして軍隊的規律を前提としている。メンシェヴィキは天の川に乗って社会主義へと至るつもりでいる。われわれの道は堅い舗装道路であり、格子と警察である。

レーニン：あなたの言葉は力強い。しかしむなしいこだまをもっている。あなたのやり方では我々は人間を失ってしまうだろう。ブルジョワジーは、その統治機構によって大衆を任意の場所へと思うままに動かせるような国家を強い国家と見なした。我々は強さを別な風に理解している。我々の考えによれば国家を強くするのは大衆の意識である。我々は彼らを意のままに操り、いちいち指図すべきなのか、それとも彼らに労働のなかで一步一步その能力、その力を自覚させていくべきなのか。

このようにレーニンのトロツキー批判が展開されるが、しかし同時に重要なのは、にもかかわらず、レーニンはトロツキーを決して反革命などとして扱ってはいないことである。それどころか、レーニンはトロツキーに政治局における自分の代理を引き受けるように要請しさえするのである。しかしトロツキーは、スターリンの手中にある官僚組織に窒息させられるのを警戒して、その要請を断る。そして、そのあと、つまりレーニンの病状の悪化のあと、スターリンとの間で、レーニンの代理をどちらがつかめるかをめぐって、互いに、思惑があって、譲りあうという場面が展開することになるのだが、それはともかく、実際においてもこの頃、レーニンは

グルジアの民族問題に関して、スターリンたちの大ロシア民族排外主義的な横暴な対応をばげしく批判して、トロツキーに問題の解決を依頼する手紙を送っている。また、論文「ゴスプラン（国家計画局）に立法権限をあたえることについて」の中で、はっきりとトロツキーの提案を支持している。つまり、率直な批判にもかかわらず、レーニンはこの最後の日々、トロツキーに一定の信頼を置いていたこともまた事実である。そして、それらはこの劇にも再現されている。そしてまた、トロツキーの方も、やはり、先に引用した論争のあとで、ラデックにたいして次のように語る、

トロツキー：ところで、レーニンはやっぱり正しいよ、カール。私もまたいつもそう言わなかっただろうか。[……] 私には、まるで私自身がひとつひとつの言葉をかたっているかのように、思えた。ひょっとして私はすべてを極端化してしまうのかもしれない、なぜならその発端においてすでに落ちつかないからだ。そして、自分自身の疑いに対する答えを聞くために、そして私の確信をさらに確かなものにするために、反論して楽しんでいるのだ。

あるいはまた、その少し前で、「レーニンは私が手を結ぶことのできる唯一の人間だ」とトロツキーは言って、レーニンへの信頼感を表している。このように、正面からの意見の対立にもかかわらず、両者の間には互いを評価する関係があることが描かれている。

トロツキーについてもう一つ付け加えると、ブラウンはこの作品の2年前にもう一つトロツキーを扱った戯曲を書いている。そして、その名も“T”，つまりトロツキーのTである。それはもちろん上演されたことはなく、それどころか、一般には知られてもいない。ブラウンは前に触れたインタビューでこの劇について例えば次のように言及している、「“T”においてトロツキーは言う、社会主義の劇場においてなお悲劇が存在するだろうか。その通り、より劣った者が見るなら、彼こそは歴史において他の者

達にとって彼がそうであるものなのだ、すなわち偽金づくり、謀反人である。彼はしかしそのように振舞わざるをえない、彼の知識に忠実であり続けようとするなら。」ここからも彼がトロツキーに強い関心、しかも一定の共感を寄せていたことが、推測できる。

## 〈スターリン〉

さて、このようなトロツキーの描かれ方と比較して、スターリンの描かれ方は、対照的である。まず、彼は実務能力にすぐれた人物としてレーニンに評されている（第2場）。それゆえに書記長の任務をまかされていると。つまり、有能な党官僚として示される。しかし、思想という点では、凡庸な人物として、描かれている。そして、レーニンが病気で倒れた後の党内対立においては、反対意見を封殺していく様子が描かれる、それがたとえ病床からのレーニンの「遺言」であっても。こういう場面がある（第11場）。

スターリン：彼は書いてそしてまた書いている……毎日一つの小論文。何が彼をそうさせているのか。ひとつまたひとつとますます鋭くなっている！

ジノヴィエフ（喜んで）：彼が批判しているならば、彼は元気になる。  
[……]

スターリン：彼は駆り立てられているかのように書いている。どこから、どこからこの心配は来るのか。党は彼を理解しないだろう。彼は何をめざしているのか。（読む）「国家機構……これほどに悲しむべきものだ、嫌悪すべきと言わないまでも。」

カメネフ：それは「偉大な歴史的発明」ではない、ということではない。

スターリン：「忙しき、それは労働の外観を……しかし一方で実は

我々の諸組織と頭脳とを汚している」(微笑んで視線を上げる)

カメネフ：それは「数世紀分の労働」を含まない、ということではない、そして「物質の怠惰に対する意志の勝利」ではないということではない。

スターリン：「計画委員会に立法機能を与えること。私はそれには反対だったが、……ある健全な中核を」—彼はトロツキーに正当性を与えているのだ！トロツキーがそばで書き取っているのだ！

カメネフ：いや、同志トロツキーはあきらめられている。[……]

スターリン：彼等は理解しないだろう、レーニンは粗暴すぎる。我々となら彼はこんなふうに話すことができる、しかし大衆はどうか。クイビュシェフの提案だが……この論文はただ特別号にのみ印刷する、ただイリイチのためだけの、彼の気を鎮めるために。

カメネフ：それはよくない。(決然と)すべてのことについて完全な真実を言う勇気のない者には同志としての権利がない。というのはその臆病さは歴史に対する不信をしめしているに過ぎないからだ、すなわち民衆に対する。だから、さあそれをプラウダに載せるのだ！[……]

因みにここで引用されている論文は、『量より質を』(1923年3月2日口述、『プラウダ』49号、1923年3月4日掲載；大月書店「レーニン10巻選集」第10巻301、303頁)、および、『ゴスプランに立法機能を与えることについて』(1922年12月27日口述の覚え書き；同上283頁)である。つまり、執筆時期の異なるふたつの文書を組合わせているわけである。これは、劇作のための便法とみなすべきものだろう。また、『1922年12月24日付の手紙への追記』(1923年1月4日口述；同上280頁)の中の次の有名な一節を裏返したパロディーもある—「スターリンは粗暴すぎる。そして、この欠点は、われわれ共産主義者のあいだやわれわれ相互の交際では十分がまんできるものであるが、書記長の職務にあってはがまんできかないものとなる。」

この場面ではまず、スターリンが、レーニンの危惧を理解することができない、ことが示されている。とほけているというよりも、実際に書記長としてその官僚機構の中心にいるスターリンがレーニンの最後の諸論文で明確に提起されている官僚主義の克服と民衆の文化革命の必要性という「遺言」の意義を理解しなかった、として描かれている。さらにそれに加えて、スターリンが党内民主主義、あるいはさらに民主主義的言論に対する尊重の信念を欠いた人物として描かれている。つまり、トロツキーに対しても確かに、レーニンは民主主義を尊重するようにと、批判するが、トロツキーはそれに対して公然とした議論によって自分の反対意見を述べている。そして、そこに意見の違いにもかかわらず一定の意思疎通があるわけである。つまり、公然とした論争による異なった意見の表明は、それ自体党内民主主義を前提として、尊重していることをも示している。ところが、スターリンはレーニんと、そのような公然とした論争は行わない。そしてまた、トロツキーその他の中央委員に対しても、路線上の公然とした論争はほとんどおこなわず、あるときはあからさまにトロツキーの意見さえ自分の意見のように述べて、「剽窃」の匂いがする、と皮肉られたりする。しかし、スターリンは、公然とした論争によってではなく、書記局をはじめとする官僚組織を握ることによって、自己の権力を獲得していく、そういう人物として描かれている。つまり、トロツキーとレーニンが前提としていた、党内民主主義を破壊する者として、スターリンは特徴づけられている。従って、この劇の中心的な批判の視点が、そのようなスターリンに向けられていることはあきらかである、トロツキーに対してではなく。

また、レーニンは民族問題に関して、スターリンを次のように激しく批判する（第7場）。

レーニン：スターリンはグルジア事件に狙いをつけた。（短く笑う）。  
彼は全ての共和国をロシア共和国に包摂しようとしている。そんなこと

になれば昔の諸民族の監獄になってしまう、この点とはくに強調しなければならぬ。[……] トロツキーは慎重に言っている：書記局、と……つまりスターリンだ、選りにも選ってスターリンか。彼の性急さ、命令的態度、……怒り、は政治において、そもそも極めて大きな災いである。彼はグルジアの全中央委員会を解任してしまった。一方、彼自身は……正真正銘の大ロシア主義的な人間なのだ。

ここには、スターリンの大国主義的態度、すなわち民族間の問題における民主主義への十分な理解の欠如が指摘されている。

### 〈レーニンの「遺言」〉

さて、最後にレーニンは、病状が悪化して以後は、舞台の奥の大きな鉄の壁の中央を繰り抜くようにして作られたベットに横たわり、苦しげに、その最後の手紙や、つまり例の「大会への手紙」や、スターリンの書記長解任を勧告するその付記を、スターリンたちの監視の目をおそれながらこわごわ筆記する秘書に対して口述する。それらの、レーニンの最後の日々の最大の関心事が、スターリンとトロツキーによる党の分裂の危険に対する心配とともに、社会主義を作りあげるための、文化の高い水準をいかにしてもたすか、つまり「文化革命」の問題であったことは、『協同組合について』や『量より質を』をはじめとした最後の日々の論文などから明らかである。そして、その中心的な課題の一つとして、古いツァーリズムのロシアからそのまま受継いだ官僚機構の改革の問題がある。それについてブラウンはレーニンに、この劇で「この官僚主義的な怪物」(dieses bürokratische Ungetüm) と語らせている。そして、先のスターリン批判に続けて、次のように語らせている(第7場)。

レーニン：党は国家権力を実際のところ単独で行使している、どんな

勢力にもコントロールされないで。労働者階級が……弱体なので、党がそれを支配している、党の隊列に加わっている……労働者をも。よろしい。党機関は……労働を指導し、幹部を選び、党が人民によってコントロールされないのと同様に、党によっても同じ様にコントロールされていない。(頭を抱える)。[……] 書記局は全ての……ポストを占めている、都合の悪い者達を……脇へ追いやる。[……] 我々は政治構造を……変えなければならない、その優位を……打ち破らなければならないのか。それは「クーデター」だ。私は考えることができない。(彼の頭がガクッと机の上に落ちる。)

レーニンのこの党および国家機構の「怪物」性との暗澹たる格闘は冒頭の『鉄の車』(Der Eisenwagen)と題された長いモノローグでも語られている(6月の上演の際にはカットされていた)。

さて、以上簡単に、作品の内容にふれたが、もちろん芝居自体としては、もっとさまざまな人物が登場する。そして、レーニン役の俳優も含めて、すべての政治局メンバーを演じる俳優はそれぞれ一般民衆の役をも演じる。ここにはレーニン等の登場人物への過度の感情移入を避けようという演出意図が感じ取れる。ただし、取り上げた3人の人物以外は、ブハーリンにしてもジノヴィエフにしても人物としての肉付けが不足していることは否めず、この戯曲の弱点と言わなければならない。レーニンの容体の悪化、およびそれにつれての政治局内部での争いという主な筋と平行して、民衆のレベルでの、農民と労働者の対立、ネップで儲ける商人と若い活動家との対立とその間を行き来する娘の姿など、当時の様々な矛盾が、さまざまな登場人物によって、ユーモラスにかつシュロート独特の軽快なテンポで視覚化されている。最後の場面は、その娘が子供を生んで、仲間が集まってきて、その子の名前をあれこれ考える場面である。始めは「ピョートル」という名前が考えられていたが、新しい時代にふさわしく、「鉄筋コンクリート」とか、あるいは「革命」(Revolution)と「電化」(Elektrifizierung)と「平和」(Frieden)を合わせて「レルフ」(Reif)と

かの名前が口にされる。そして、その場で同時にはじめて電灯が点される。結局「ヴォロージャ」、つまりレーニンの愛称と同じ名前に決まる。そこには、政治局の争いにもかかわらず、民衆のレベルでの、革命後の新しい時代への素朴な希望が見事に表現されている。そうしたにぎやかで、ユーモラスな場面に、レーニンの死の知らせが届く。一瞬のうちに、未来に対する不安がのしかかる。そして、その不安な沈黙の中で、劇は終わる。その後のスターリンの政権掌握後のソビエトに起こったことがらを思いうかべさせる、暗示力を持ったラストシーンとなっている。

### 〈上演の意味について〉

DDRの舞台に公然とトロツキーやブハーリンその他の「社会主義の敵」が登場して、その思想を示す、ということそれ自体が、DDRにおける公開政策の先駆けとしての意味を持っている、ということがまず言えるだろう。それによって、まるで「悪魔」みたいに扱われてきたトロツキーたちが、思想そして行動についてオープンで客観的な議論の対象となることが可能になったわけである、少なくとも劇評という形式をとって。そのことは、スターリンたちによる社会主義の歴史の歪曲という問題を公然と提起することでもある。そして、それはさらに、ソ連のみではなく、DDRにおける社会主義の歴史の見直しにも繋がる契機を含んでいる、ということも言えるだろう。

そのこととも関連するが、もっと本質的な意味は、現在の社会主義社会の在り方についての、その成立の起源に遡っての再検討を促す、という点にあると言えるだろう。特に、この劇で示されるレーニンの最後の問題提起、前近代的な官僚主義の克服や民主的な言論の保障を含めて、国民の文化の水準を高めることによる、下からの、社会主義の建設の必要性という課題が、現在のソ連において、そして何よりDDRにおいて果たして実現されているか、という問いをこの劇の上演は提出している。

## 〈1月17日の事件に関連して〉

この問いに関して、思いだされる一つの事件がこの年の1月17日にあった。この日は1919年の1月に殺害されたローザ・ルクセンブルクとカール・リープクネヒトを追悼して、東ベルリンで恒例の大規模なデモが行われた。新聞発表によれば約20万人の参加があった、という。私も実はフンボルト大学の列に入って少し歩いた。首相のホーネッカーをはじめ SED の指導者たちは、ルクセンブルクをはじめ多くの社会主義者たちが葬られ、「死者は警告する」(Die Toten mahnen) という碑文で有名な目的地のフリードリヒスフェルデの墓地の前に3時間余りも立ち続けて、デモ隊に手を振っていた。官製デモという批判はあるけれど、核兵器廃絶などのスローガンを掲げたこの大デモにはやはり一定の意義がある、と思った、そして、今もそう思っている。しかし、この時この大デモの片隅で起こっていた事件もまた、見過ごすことの出来ないものである。つまり、このデモの際に言論の自由と西側への移住の自由等をもとめる要求を掲げた者たちがいて、かれらが警察に逮捕されたのである。同様のことはベルリン以外でもあり、その全体の規模は不明だが、逮捕者の数については数十名から100名を越えるものまでさまざまな推定がある。そして、逮捕されたもののうち、その後かなりの者が実刑判決を受け、その多くが西ドイツに追放された。西側への追放にいたる過程それ自体も興味深いものだが、それには触れないことにして、ここでの問題は、あのような行為が即逮捕につながり、そしてさらに実刑判決が下されるということである。容疑および罪状は、DDR の新聞に掲載された DDR の検事総長付きの広報担当責任者のインタビューにおいて次のように語られている(88年1月28日付 ND)、「逮捕された者達に対しては、彼等が DDR の憲法に基づく秩序に敵対する行為を犯した、という緊急の容疑がある。その際彼等は西側の秘密情報機関との関係が知られている DDR 国境の外側の人物や機関との接触を

持っていた。[……] 騒擾罪 (Zusammenrottung) その他の逸脱行為のためにこれまでに7名が6ヶ月から1年の禁錮刑の有罪判決を下された。この決定によって裁判所は、挑発行為によってベルリンの住民にとって伝統となっているローザ・ルクセンブルクとカール・リープクネヒトの追憶と遺言を称える催しを妨害しようとするあの試みに対抗したのである。

[……] この判決は我々の国家の法秩序と反ファシズムの伝統にふさわしいものである。」つまり、罪状は、DDR 刑法に沿って言えば、217条「騒擾」罪、218条「不法な目的遂行のための組織結成」(Zusammenschluß zur Verfolgung gesetzwidriger Ziele) 罪および219条「不法な連絡」(Ungesetzliche Verbindungsaufnahme) 罪等に該当する、と考えられる。具体的なケースを一つ挙げると、西ドイツで報道された写真によれば、というのはDDRの新聞にはその写真は報道されなかったからだが、逮捕された者の中には17歳と19歳の若い女性もいて、かれらは「自由というのは常に別な風に考える者にとっての自由である」(Freiheit ist immer Freiheit des Andersdenkenden) というローザ・ルクセンブルクの言葉を引用した横断幕を掲げた。そして、6ヶ月の禁錮刑の判決を受けた。この件について、ある興味ある記事が事件直後にSEDの機関紙NDに掲載された(同上)。それはDDRのペンクラブ会長であるハインツ・カムニッツァー (Heinz Kamnitzer) 教授の『死者は警告する』と題する一文で、そこではこの事件のことを「ローザ・ルクセンブルクとカール・リープクネヒトへの追憶を意図的に妨害し、かつ汚す」行為であり、「神の冒瀆のような唾棄すべきもの」と呼んでいる。そして、あの引用文はブルジョワ民主主義的な自由観を示しており、ルクセンブルクはそれを克服して社会主義的な自由観に到達したのであり、あれはルクセンブルクの「最後の認識」を歪曲して伝える引用である、と。しかし、言うまでもなく、どの引用が最終的な思想的到達点を示しているか、という問題は学問的論争の問題であって、仮にその指摘が正しいとしても、警察が介入すべき問題とは思われない。あの引用を掲げた者たちの主張がDDRの社会主義社会にとって有害である

と考える者は、自由な言論による批判によって、対応すべきであろう。それもまた、政治権力を後ろ盾にした批判ではなく、下からの、一般の民衆による世論によって、克服されるべきものである。そこでまさに社会主義社会の民衆の広い意味の文化のレベルが問われるのである。警察の力によって一部の者の主張を抑圧しようとするのは、あのカーメネフのせりふの通り、裏を返せばそのような一般国民の社会主義的な文化の水準への不信に基づいている、といわなければならない。

もちろん、DDRの内部のそのような考え方の対立は西ドイツをはじめとする西側の政治権力によって常に反社会主義のためのキャンペーンに利用される危険がある。今回も、その報道の素早さと詳しさから見て、あらかじめ西側のマスコミとの連絡があった、と推測せざるをえない。あるいは、さらに西側の機関からの援助についても報道されている。分断国家としての両ドイツの特殊な矛盾に満ちた関係抜きにDDR指導部のこの事件に対する強権的な対応について語るができないのは確かであるだろう。

さらにもうひとつ、ドイツのナチズムの歴史の記憶とも切り離して語れないことを、事件後の、オーストリアの記者とのインタビューにおける首相のホーネッカー自身のつぎのような発言からうかがうことができる――「オーストリアはこの分野で大きな経験をした、つまり、別な風に考える者はまたこの文句を受入れずに、棍棒で殴りかかるようなファシストでもありうるという経験を。我々はナチス突撃隊と親衛隊を体験した。私自身はコルムビアハウス強制収容所にいた、[……]。これらの者達はみんな別な風に考える者達である。だから貴方たちは、私が別な風に考える者と正常に考える者 (Normaldenkende) との間を区別する、ことを許していただかなければなりません。」(88年6月15日付 ND) 思想・表現の自由を完全に許せば、ファシズムをも許すことに繋がる、というこの考え方は、ナチスと闘って自身10年間も獄に繋がれていたホーネッカーのような人々にとっては、偽らない心情かもしれない。しかし、問題は、あの引用を掲

げた10代の娘たちがファシストなのか、ということである。この考え方は、それがたとえ善意であったとしても、社会主義社会における個々の政策への批判者をただちにファシストと同一視する、という危険性を孕んでいる。そして、そのことによって社会主義内部の建設的で健全な内部批判を封じる働きをもするのである。これは、歴史の苦い皮肉である。反ファシズムの信念が社会主義における民主主義を抑圧する結果となっているのである。さらに、意地の悪い見方をすれば、反ファシズムという言葉はDDRの国是が民主主義の抑圧の道具にされている、と言われてもやむをえない。

たとえ、仮に西側の機関からの援助があったとしても、そしてまた西側のマスコミによって意図的に反社会主義キャンペーンに利用されたとしても、あのような言論・表現を強権的に封殺しようとする姿勢は、長い目で見て、社会主義社会の健全な発展にとってマイナスとなる、と思われる。あのような対応はかえって西側の反共主義者にとって好都合な攻撃材料を提供することになるだろう。そして何より、自由な言論による批判の契機をも封殺することによって、下からの高い文化による社会主義の建設というレーニンの問題提起に逆行することにもなるだろう。

## 〈議論の文化〉

一方、ソ連においてはそれらの問題がゴルバチョフ以後公然と取り上げられ、盛んに議論され、新聞等の規制の大幅な緩和や、言論抑圧に利用されてきた刑法の条項の見直しなど、一部すでに解決のための具体的措置がとられ始めている。

すでによく知られているように、スターリン問題の扱い方など政治的な理由でこれまで発表できなかった文学作品などが数多く公表されたり、またトロツキーの登場する記録フィルムが初めてテレビで放映されたりしたことのほかに、具体的な措置として刑法の改正も検討されている、という

新聞報道がある（1988年3月7日付 朝日、ソ連科学アカデミー国家と法研究所のヤコブレフ刑法理論部長とのインタビュー）。そこでは、刑法改正の方向として、「ソ連国家および社会体制を中傷する故意の虚構の流布」に関する190条1項の削除や、70条の「反ソ煽動・宣伝」罪の規定を厳密化して、「体制批判を行ったり、その文書を流したりしても、暴力的手段や非合法手段に訴えないかぎりには罪とならず、言論の自由が保障される」ように改正する、ことなどが検討されている、と語られている。また、例えば、先に引用したクルト・ハーガーによるSED政治局の報告が行われる少し前にDDRの新聞にも、ただし一切のコメント抜きで、発表された「ソ連共産党中央委員会による第19回党全国協議会へのテーゼ」には、次のような言葉がみられる（1988年5月28/19日付ND）。「我々の時代の特徴は真の意見の複数主義および理念と利害の率直な対置である。それによってソビエトの人間はその知的および道徳的潜在能力をより完全に利用し、社会生活により活動的に関与するための可能性を獲得するのである。」このように基本目標を述べたあとで、党内民主主義に関してレーニンを例に引きながら述べていることは、『レーニンの死』におけるブラウンの問題意識と見事に重なり合うものである。「党においても社会においてもいろいろな見解の対置や批判の常に効果的に働くメカニズムをわれわれ必要としている。率直さの政治の疑う余地のない成功を根付かせ、強めることが重要である。我々の国において歴史的に形成され、貫徹され、今日民主化の過程と有機的に結びついている一党制においては、この問題は死活に係わるほど重要なものである。この点でレーニンのアプローチが非常に重要である。レーニンは分派の結成を非難したが、しかし同時に、あれこれの問題における意見の相違を理由として同志を迫害することに対しては決然と反対したのだった。絶間ない、そして建設的な対話、議論の文化-(Kultur der Diskussion)、内政および外交問題についての広範な情報ならびに世論の調査とその考慮が党生活の絶対に手放してはいけない特徴とならなければならない。」

ところで、ゴルバチョフの言う「新しい思考」をめぐって、西側諸国とのその協調主義的外交政策が資本主義国などでの労働者の運動を抑圧する危険があることが、日本でも指摘されている。そしてその指摘自体は正しいと考えられるが、しかし同時に「民主化」や「公開」政策などの内政改革が、いわゆる「資本主義の弱い環」、前近代性を多く残したロシアで行われた社会主義革命の孕む問題を克服し、レーニンの言う「社会主義の建設に不可欠な高い文化」を作り上げるための、歴史的に必然な課題に係わっていることもまた、十分に評価されなければならない、たとえまだ始まったばかりだとしても。そしてそのことを、『レーニンの死』上演に係わった人々をはじめDDRの多くの人々は、敏感にそしてまさに自分自身の課題として受止めているのである。

そのDDRにおいてはすでに述べたように、ソ連での動きに対してSED指導部は警戒的あるいはさらに否定的な姿勢を示すのみで、具体的な見直しの動きがほとんどみられない。こういう状況の中で、この劇の上演は、下からの創造的で民主的な社会主義の実現という課題を単に提起しているだけではなく、政府との一定の緊張関係を孕みながら、その上演自体がそのための一つの実践という性格を強く帯びているのである。そして、その緊張関係が今後どのように変化していくか。そしてブラウンにもシュロートにも、その他の関係者にも基本的な影響を与えているブレヒト (Bertolt Brecht) の根本的な問題意識、すなわち社会に対する理性的で批判的な思考を観客に喚起することによって、演劇が劇場の外の現実にどのように影響を与えうるか、という問いが、今後のDDRにおいてどのような答えを見出すか。政治演劇の可能性の問題が社会主義社会の改革の可能性の問題と鋭く切り結ぶ場として、DDRの演劇は今注目に値する。

この劇は先に触れたように1988年6月末に先行上演された。上演は3日間、私はそのうち初日と3日目の2回見た。客席は両方とも満員だった。上演後、客席からは大きな拍手があった。(了)

という状況だ、いわば閉塞状況だ、という意味だろうと、私は解釈した。

実際、さまざまなレベルの多くの人達が、ペレストロイカの動きに強い関心を寄せ、DDRにおいても同じ方向の何らかの具体化を期待していた。特に、「民主化」(Demokratisierung)や「公開」(Glasnost)政策を要求する気持ちが強いと思えた。関心の強さは、例えば、88年の春にフンボルト大学のドイツ文学科で、SEDの学生支部の主催で、ペレストロイカについての講演会が開かれたことにも現れている。ただし、その内容は現在のDDRとペレストロイカの屈折した関係の一端を示すものだった。報告者は、5年間ほどソ連にいて、帰ってきたばかりのある経済学専攻の女性の講師だった。彼女は、まず第一にペレストロイカはソ連の経済問題である、という立場だった。そして、その経済の立て直しの手段として、民主化とか公開とかの政策が必要となっている、と。そして、DDRの経済はソビエトにくらべてうまくいっている、と。つまり、DDRではソ連のような、内政改革は必ずしも必要ない、というのが全体の基調となっていたのである。それだけでなく、民主化政策の下でソ連で行われている議論の中には、社会主義そのものの否定に至るようなものがあって、それは問題だ、というようなことも述べていた。私は、その話を聞きながら、SED指導部の方針に忠実な党員のひとつの具体的な姿を見たような気がした。そこで私は、後の質疑の時に、特に、言論・表現の自由などの抑圧に適用されている条項の改正など、ソ連で進行している刑法の見直し作業に関連して、DDRにとってのペレストロイカの意味について質問してみた。するとその講師は、「たしかにDDRでも、もう少し率直さ(Offenheit)が必要だとは思う。たとえば、コンビナートの在り方にしても、以前はDDRの経済成長の促進要因になっていたけれども、現在では規模が大きくなりすぎて、かえって成長を阻止する要因になっている場合がある、と思う。このように、DDRの経済にもいろいろ問題があるが、新聞などを読んでも、その現実の問題についてはほとんどわからない、という状態で、